

普通作物の部

(1) 普通作物共通

ア 普通作物における薬剤散布量の目安

作物名	生育ステージ	10 a 当たり散布液量
水 稲 大 麦	生育初期	100 ℓ
	穂ばらみ期以降	150 ℓ
サツマイモ		100 ～ 300 ℓ
サトウキビ	生育初期	100 ℓ
	生育中期	150 ℓ
	生育後期	180 ℓ 以上
大 豆		100 ～ 150 ℓ
落 花 生		100 ℓ

※ 但し、散布薬量の定められた農薬は使用基準に準じる。

イ 環境と調和した防除の基本的考え方

本県の水稲栽培は、恒常的にいもち病や紋枯病などの病害、海外飛来性害虫（ウンカ類、コブノメイガ等）やツマグロヨコバイ等の害虫が発生しやすい条件にある。畑作物においてはハスモンヨトウなどのチョウ目害虫、コガネムシ類や有害センチュウ類などの土壌害虫の被害が問題になっている。このことから、病虫害防除は安定生産を図るために、欠くことのできない重要な作業である。これまで防除の手段として、効果が高く省力的であることから、化学農薬に偏った防除が行われてきた。このため、病虫害の抵抗性の発現、天敵の減少、周辺環境への悪影響等を招いている。そこで、本県においては、化学農薬のみに依存せず、耕種的防除法、物理的防除法、生物的防除法の防除技術を組み合わせた総合的防除を行う環境と調和した農業を推進している。

(2) 水稲における化学農薬低減技術

ア 病虫害防除の基本的な考え方

現在の病虫害の発生状況と作物の生育状況を把握しながら、今後、経済的に許容できない被害が想定される場合において防除する。このためには、過去における地域で発生する病虫害の種類とその発生パターンや気象的条件等を参考にし、その地域にあった防除暦を作成する必要がある。また、効果的な防除を行うためには、耕種的、物理的防除法を積極的に導入し、化学的防除を行う際にも天敵類への影響を考慮するなど、農薬による消毒的な考え方から脱却し、病虫害の発生程度を低く管理する考え方を目指すことが必要である。

イ 具体的な防除法

(ア) 長期持続型箱施薬剤等の利用

化学的防除法としての化学農薬の散布回数を減らすとともに省力化の観点から、長期持続型薬剤の育苗箱施薬、側条施薬等の導入を図る。

(イ) 発生予察に基づく防除

発生予察情報を活用した効率的な適期防除を行う。また、ほ場における発生状況を良く観察し、部分的な発生の場合は、スポット散布によって農薬使用量の節減を図る。

(ウ) 耕種的防除法の導入

いもち病やばか苗病などは種籾で伝搬することから、種子を更新し、種子消毒の前には塩水選に

より健全な種籾を選別し利用する。冬季の耕耘は、除草効果の他にスクミリンゴガイの殺貝や黄萎病の発生抑制にもつながる。また、作期・作型の統一、同一作型の集団化、畦畔雑草、周辺雑草の管理及び置き苗等の早期処分、適正な水及び肥培管理等の耕種的防除法を積極的に導入する。

(エ) 周辺環境への配慮

周辺の民家や周辺作物に薬剤が飛散しないようドリフト防止に努める。

(3) 畑作物における化学農薬低減技術

ア 抵抗性品種の利用

病害虫に強い品種を栽培する。サツマイモでは、サツマイモネコブセンチュウに対する抵抗性を持つ品種を、サトウキビでは黒穂病やさび病などに対する抵抗性を持つ品種を利用する。

イ 耕種的防除

健全な種子を用い種子伝染性の病害を予防する。害虫の生息場所であるほ場周辺の除草を行うことでほ場への侵入を防ぐことができる。

ウ 生物農薬の利用

サツマイモでは、鱗翅目害虫やコガネムシ幼虫に対するB T剤やセンチュウ類に対するパストリア水和剤が利用できる。

エ 対抗植物利用技術

輪作体系にクロタラリア、ギニアグラス、エンバク、落花生などの対抗植物を取り入れることでセンチュウの増殖を抑制できる。

オ 輪作

センチュウによる被害を軽減するためには、センチュウが増殖しにくい作物との輪作が効果的である。さらに、輪作作物に対抗植物を利用すると有効である。サトイモでセンチュウを抑制するには、サツマイモのセンチュウ抵抗性品種や落花生等との輪作が有効である。